

第一話
餓狼おどる山

兵庫県六甲山

かつて日本人初のWGPチャンピオンを輩出した程の日本有数の走り屋のメッカである。
二輪だけではなく、四輪の強者も続々と集ってくる。

マカオGPを彷彿させる再度山、テクニカルな有馬側と高速コーナーの芦屋側へと続く
芦有、Hな休憩所もある裏六甲等々走り屋を魅了し続けるこの山に、今日もまたひとり魔
物に取り付かれた若者が足を踏み入れた。

彼の愛機は流行のマルチシリンダーや2ストロークでもなく見たことも無い 型で、
水冷式ラジエーターとダウンドラフトキャブを備えていた。

タンクの色はグレイ。そう、後にグレイゴーストとして走り屋たちを震撼させることにな
る伝説の始まりだった。

To Be Continued

第二話

灰色の幽霊

山道といっても、高低がついている所ばかりとは限らない。

六甲山でも再度山から登り、つきあたりのT字路を右に曲がってしばらく行くと急に道が開け路面も比較的新しいスポットが現れる。

そこから1km程先の旅館街まで高低差の無いほぼフラットなコースがチーム・ツーホイラーズのホームだった。

国産レーサーレプリカ中心の彼らのチームリーダー的存在なのがゴロワーズカラーを纏ったRZ350改に乗る将夫である。彼は、鈴鹿4耐をあのM城とペアを組み優勝した経歴を持つ現役のレーサーでもあった。

梅雨の中休みといったある休日、彼らは待ち焦がれたようにホームコースへやって来た。

待ちきれずに、チームの切込隊長カズがのフロントホイールを高々と持ち上げコーナーに消えて行く。他のメンバーもつられるようにガツンとギヤを叩き込み白煙とともに続いていく。将夫といえば両切りのゴロワーズを指ではさみ、口に入ったタバコの葉っぱをプッと吐き出しながら時計を睨んでいる。カズがスタートしてから40秒経っていた。

そろそろ行くか・・・ヘルメットのバイザーをパタンと閉じて、ギアをローに入れようとしたその刹那！

ツイン特有の排気音とともに彼の視界に灰色の帯状の物体が飛び込んできた！

こ、これは幻か？

瞬きの間にその姿はなく、ただ路面には黒々とタイヤのブラックマークとゴムの焼ける匂いが残っていた。

上等だっ！将夫のRZがロケットスタートをきった。

To be Continued

第三話

ビリビリクラッシュメン

パイーン　パイーン　パンッパンッ　ガリガリガリッ　ブブブパイーン　パーン！
市販レーサーTZのエンジンを換装する将夫のRZが全開でコーナーを抜けていく。
奴は一体何者だ！？その思いだけに駆られスロットルを開けていく。
数十秒後、彼の目に飛び込んできたのは無残にクラッシュしたチームのマシンだった。
路肩にうずくまる仲間たち。しかし、将夫はスロットルを緩めない。
レーサーとしての本能が彼を掻き立てる。必ず捕らえてみせる！
コーナー山側には昨日来の雨でところどころウオータースポットが残っており、
将夫のRZも時折これに足をとられるが驚異的なマシンコントロールでコーナーを
クリアーしていく。
だが、終点の旅館街の交差点まで膝を削って攻めまくったが、とうとう奴の後姿さえ捕ら
えられなかった。伝説の始まりだった。六甲にとんでもない怪物が現れた！

To Be Continued

第四話
沸騰！六甲山帝国

レーサー将夫がブッチぎられた！

この噂はしかし六甲の走り屋の間ではさほど問題視されなかった。

なぜなら、六甲には語り尽くせないほどの最速伝説が存在するからである。

たかだか国際B級のレーサーが負けたくらいでは、この山はびくともしないと思われていた。

だが、事態は急変する。バトル禁止の下りではあるものの、芦有でケイターハムに乗る中迫がグレイゴーストにちぎられたのである。

拳句に奥池横の長い下りの先の左コーナーでクラッシュしてしまった。

ルール無用のその走りに、ついに六甲山の走り屋を司るあの大物が腰を上げた！

To Be Continued

第五話 六甲六聖天

芦有の中迫（兄）、表六甲の神保、裏六甲の鳳、西六甲の澤渡、有馬街道の進藤、再度山の鳴神・・・この山には、六人の生きる六甲最速伝説達がいる。

人呼んで六甲六聖天！！

他府県の遠征組だろうが、隠密でやって来る現役レーサーだろうがことごとく蹴散らしてしまう不敗の六人である。

今回の事件で真っ先に腰を上げたのが芦有の中迫である。

クラッシュさせられたのは彼の弟だった。

バトル禁止とはいえ、弟のマシンはケイターハムでも最速の JPE！

しかも宝殿ゲート～芦屋料金所までの区間は、兄と遜色ないスピードを誇っておりまごうことなき芦有 No 2 だった。

その夜、展望台駐車場には続々と芦有の精鋭達が集まってきた。

ゴースト狩りの始まりだ！

To Be Continued

第六話 ジェイソン

時刻は午前零時を回っていた。

「遅いな・・・！？」中迫が呟いた。

定期的に斥候を出して報告を待っているのだが、もう帰ってきていい筈の CIVIC 部隊が遅れている。嫌な予感が中迫の脳裏をよぎった。

そしておもむろにヘルメットを被ると、アメリカ仕様のティアドロップ型のタンクを持つカワサキにまたがった。サイドカバーには Z1000J の文字。これぞ六聖天中迫の愛機、伝説のジェイソンである。集まっていた走り屋たちの畏怖と羨望の視線が集中する中、ゆっくりと駐車場を出て行く中迫の背中から白いオーラが立ち昇った。

さあ、決戦だ！

To Be Continued

第七話
G 線上のドリフト

駐車場を出てしばらく走ると、トンネルが現れる。暗いトンネルに入るとジェイソンの四気筒とは異質のエグゾーストノートが交錯して襲ってきた。

「こいつだ！」本能的にすれ違いざまアクセルターンを決める中迫。

空冷 DOHC 4 気筒 9 9 8 c c のレブカウンターが 8 5 0 0 回転まで跳ね上がる。

一瞬にしてオーバー 1 0 0 馬力に達し前輪を持ち上げようとするモンスターをぐいっと

押さえつけると今度右へ左へ軽々とバンクさせていく。リヤタイヤは滑りっぱなしだ！

駐車場前のコーナー手前でグレイゴーストのケツに張り付くと一気にイン側について並びかけた。「コーナーは回らせないよ。このまま仲間の待つ駐車場へ押し出してやる。」

確かに逃げ場は駐車場しかない筈だった。ところがこいつは平然とバイクをバンクさせ、中迫に接触してきた。下りコーナーの為時速は瞬間的に 1 6 0 キロを超えているのにもかかわらずにだ！2 台のマシンが絡まりあってコーナーを抜けていく。

「一発じゃ決まらねえか・」気を取り直して再びゴーストのバックに回り込む。

2 個目のトンネルを抜けると、きついカントのついた直角コーナー“ コークスクリュウ ” が待ち受ける。ここでも、圧倒的なストレートスピードを持つジェイソンがゴーストのインを突き、並びかける。進入速度 1 8 0 キロ！がばっと上体を起こし 2 速へシフトダウン、同時にフルブレ - キング。ブレーキローターが赤く燃え煙が立ち上がる。フロントフォークはフルボトムし、リヤタイヤがふわっと持ち上がる。前輪に充分荷重の乗り切ったところで旋回開始。リヤタイヤがズバッとアウト側に流れ出し、フロントタイヤも小さくしかし、超高速で流れ出す。伝説の 2 輪ドリフト炸裂だ！ピンホールを突き刺すようなコーナリングラインを描き出しジェイソンがついにゴーストの前に出た！

To Be Continued

第八話

レバント・トライアングル

コークスクリューであっさりとゴーストをかわした中迫は、もはやその勝利を確信すると共に、少々 of 失望感を拭い切れなかった。奴のマシンは発売間もない、ヤマハ XZ であることは間違いない。排気量は 400 か 550 か分からないが、シャフトドライブの、のんびりツーリングバイクだ。スーパーバイクで E・ローソンとカワサキに輝かしい勝利をもたらしたベースマシンたるジェイソンとは、生い立ちからして差が歴然としている。

コーナーを 3 つほどクリヤーしてもゴーストは、追いつくどころかやや遅れ出している。3 つ目のコーナーを抜けると、長い下りストレートが始る。この先の左コーナーで弟はクラッシュしてしまった。中迫はそのコーナーで決着をつけようとしていた。

その気になれば 200 キロを軽々と超えるスピードで下っていけるのだが、中迫は回転を抑えゴーストを待った。しばらくしてゴーストが中迫を猛然とパッシングしていく。

すかさずスリップにつく中迫。スリップを嫌うようにゴーストが左右にマシンを振り出し下っていく。時速 180 キロ。XZ の限界スピード。しかしジェイソンは余裕しゃくしゃくでついて行く。半ばまで下ったそのとき奥池側から 1 台の BMW が進入してきた。

BMW はそのとき初めて猛烈な勢いで下ってくるバイクに気づいたのか、こともあろうにコースをふさぐ様にその場に止まってしまった。典型的な芦屋奥様運転である。

中迫は、冷静に BMW のバックライトが点灯するのを確認すると山側のラインを選びマシンを傾ける。だがゴーストは逆のラインを選んだ。「ばかやろう！逆だ！」中迫がバイザー越しに怒鳴った。「逆はてめえだよ」ゴーストはほくそえむと BMW にパッシングの嵐を浴びせ倒す。奥様はあわててギヤを D レンジに入れなおし、急発進！その後ろをゴーストがすり抜ける。中迫は？

間一髪、ゴーストの作戦に気づきマシンをゴーストに追従させていた。

To Be Continued

第九話 アクロバティックス

再び加速体制に移る2台のマシンを因縁の左コーナーが口を開けて待ち構える。
実際このコーナーより、その先の橋上の右コーナーの方がバンピーな複合コーナーになっておりマシンの差が表われやすいのだが、中迫はこの左コーナーにこだわった。
クリップを奥にとってゴーストのラインを塞ぎ、2輪ドリフトで一気にマシンの向きを変えブッチぎる。中迫のシナリオだった。スリップから抜け出した中迫がシナリオ通りインを刺しブレーキングを遅らせてコーナーに進入していく。アウトに振られたゴーストは、中迫が邪魔でマシンを倒すこともできず、併走を強いられる。
「馬鹿のひとつ覚えのガードレール送りかよ」ゴーストの目が冷たく光った。
中迫より一瞬早くフルブレーキングを開始したゴーストはジェイソンの後輪のイン側にXZの前輪をもぐりこませると、クリップからドリフトを開始したその後輪をすくい上げるように跳ね上げた！まさに一瞬の出来事だった。さらにバランスを保とうとカウンターステアをあてた前輪を今度は抜きざまに後輪のスライドで反対側に跳ね飛ばす！
バランスを完全に殺されたジェイソンがのたうちまわるように宙を舞った。
皮肉にも弟と同じコーナーで、六聖天の中迫が散った。

To Be Continued

第十話

崩壊！六甲山帝国

駐車場から下ってきた彼らはその目を疑った。彼らの目に入ってきたものは、無残に燃えてしまったジェイソンと、松の木に足がひっかかり両手をぶらりと下に垂らして無様に失神している六聖天の姿だった。遠くからあざけ笑うように、チューリップの歌のアクセルミュージックが響いていた。

六甲山帝国に激震が走った！何人も侵し得なかった伝説が崩壊したのである。

中迫の敗北の知らせを受けて次に腰を上げたのが西六甲の澤渡だった

ツーホイラーズの面々も集まってきた。

中迫の敗因は、真っ向勝負しなかった事だったと考える澤渡は、もはやゴーストをブッチぎることしか頭になかった。

彼のマシンはDUCATI851。1シリンダー当り4本のバルブをデスモドロミック駆動するエンジンでデスモクアトロとしても知られている伝説的バイクである。900SSあたりと比べてヘッド周りが重いため、軽快感に欠けるとも評されるが、低速域からのつきがよく、頭打ちのない吹け上がり、そしてインジェクションならではのオールシーズン性能の高さがありである。スーパーバイカー同士、澤渡は中迫に対し親近感を持つと同時に、強烈なライバル意識も有していた。いつかやりあうときが来る、そう思っていたのだがまさかあのようなことになってしまうとは…。無念さが憎しみに変わるのに時間はかからなかった。大排気量バイクの強みを活かす為、澤渡は森林植物園をスタートに選んだ。200Mほどのストレートだが急勾配がついており、おそらくXZ400だと思われるゴーストに対しかなりのアドバンテージを稼げると踏んだからである。更に25番、30番、41番のコーナーに、将夫らツーホイラーズのメンバーを配し、ぜってえのがさねえ体制を整えた。

さあ、あとは、ゴーストの登場を待つだけである。闇が静かに山を覆っていく。

第十一話 帝王の罠

西六甲に辿り着くまで、ゴーストはいかなるコースで登ってくるのか、再度山か有馬街道か。いずれにしてもそこには六聖天が待ち構えている筈で、果たして奴は、登ってこれるのか？

だが奴はやってきた。六聖天のうち間違いなく誰かが敗北していた。

2連敗。これ以上負けるわけにはいかない。森林公園の木々が突風にあおられ生き物のようにのたうちまわっている。森林公園前のスタートラインにゴーストが差し掛かった！

ブオゥ！ 851 がカタパルトからはじき出されたかのごとく発進する。ゼロ発進ながらパワーにものをいわせ、狙い通り急勾配の直線で澤渡はゴーストの前に出た。

ゴーストはけなげにスリップにつこうとするのだが、パワーの差はいかんともしがたくグングン離されていく。第一コーナー。ここも急勾配がついているため差は詰まらない。

というより 10 個目のヘアピンまでは、比較的高速コーナーが多く、ここまでのアドバンテージで一気にゴールまで突っ走ろうというのが、澤渡のシナリオだった。ドリフトを多用する中迫と違って、澤渡のライディングはトラクション重視のトラディショナルなもので、アクセルワークも繊細さを極め、ロック寸前のブレーキングテクニックとあいまって、安定感ある速さを醸し出していた。こうして澤渡思惑通り、25 番のヘアピンに差し掛かった頃にはゴーストに対しコーナー 1 個分の差をつけていたのだった。